



鳥取大学
Tottori University

国際交流センター
2023年度

ウガンダ 海外実践教育 プログラム報告書



ウガンダ海外実践教育プログラム

2024年2月13日～3月9日



プログラムについて

本プログラムは、学生の豊かなグローバルマインドの醸成を目的とし、将来大きな発展が期待されるアフリカ・ウガンダにおいて、ウガンダ最大の国立大学であるマケレレ大学の協力のもと2015年から実施しています。アフリカが抱える課題と可能性を多様な視点から学ぶ内容となっており、マケレレ大学講師陣による社会経済、文化、歴史、農業等の多岐にわたる分野の講義に加え、講義で得た知識を様々なフィールドワークを通じて深めることができます。

プログラムでの様々な課題についての直接的な体験を通じ、これらの課題を自らのものとして捉え、身近なところから解決に繋げる価値観や行動力と、グローバルな倫理観の育成を目指しています。プログラム最終日には、参加学生自ら関心を持ったテーマに対して「今すぐ行動に移せそうな解決策やアイデアを提案する」という課題に取り組みました。

本報告書には、2024年2月13日から3月9日までの日程でプログラムに参加した学生9名のウガンダでの気付き、学び、プレゼンテーションの内容についての考察がまとめられています。

2019年度を最後に、コロナ禍により派遣を中止していましたが、様々な方のご協力のお陰で、この度4年ぶりに実施することができました。特に、本プログラムを遂行するにあたり、在ウガンダ日本国大使館、JICAウガンダ事務所、ネリカ米振興プロジェクトに参加されているJICA専門家、海外協力隊員の皆様には、多大な協力を賜りました。改めて、ここに感謝申し上げます。

スケジュール

Overseas Practical Education Program in Uganda, Feb. 13 th - Mar. 9 th , 2024 (Tentative Program Schedule)				
Day	2024	AM	PM	
1	火	2月13日	出発準備	関空出発 15:40 KIX-HND (NH992) 23:55 HND-DOH (QR813)
2	水	2月14日	乗換え 9:45 DOH-EBB (QR1383)	エンテベ空港到着 15:30
3	木	2月15日	Special Lecture: (9:30 - 11:30) ◆International Cooperation 1 (在ウガンダ日本国大使館表敬)	Special Lecture: (PM) ◆International Cooperation 2 (JICAウガンダ事務所表敬)
4	金	2月16日	Free day (マケレレ大学キャンパスツアー)	
5	土	2月17日	赤道見学	Garden city mall
6	日	2月18日	Free day	Free day
7	月	2月19日	Opening Ceremony & Campus tour (9:00 - 12:30) Introduction to Tottori and Tottori University (マケレレ大学)	Lecture 1: (14:00 - 16:30) ★Introduction to Makerere University and higher education system in Uganda (ウガンダの高等教育)
8	火	2月20日	Lecture 2: (9:00 - 12:30) ★Introduction to Ugandan and African History (ウガンダの歴史)	Lecture 4: (14:00 - 16:30) ★Agriculture in Uganda (ウガンダの農業)
9	水	2月21日	Lecture 3: (9:00 - 12:30) ★Uganda's Economy and Industries (ウガンダの経済と産業)	Uganda Museum
10	木	2月22日	Study visit to National Crops Resources Research Institute, (JICAのコメ振興プロジェクトサイト見学)	
11	金	2月23日	Friday Market	モスク、ナカセロ
12	土	2月24日	Free day	Free day
13	日	2月25日	Free day	Ndere Culture Center
14	月	2月26日	野生動物教育 センター-Uganda Wildlife Conservation Education Center	草の根技術協力 (コンゴヨウム保護事業)
15	火	2月27日	Gombe Secondary School訪問 JICA海外協力隊 教育活動見学	
16	水	2月28日	Lecture 5: (9:00 - 12:30) ★Nature Conservation (ウガンダの自然保護)	Preparation for Murchison Falls National Park trip (自然公園へのフィールドトリップ準備)
17	木	2月29日	Travel to Murchison Falls National Park	Study on Waterfront ecosystem (Boat cruise)
18	金	3月1日	Study on Land-based Natural Ecosystem (Game drive)	Return to Kampala
19	土	3月2日	Free day	Free day
20	日	3月3日	Free day	Acacia mall
21	月	3月4日	Kennedy Secondary School見学、学生と交流 (8:30 - 18:00)	
22	火	3月5日	Lecture 6: (9:00 - 12:30) ★Making Effective Presentations (プレゼン作成方法)	最終プレゼン準備
23	水	3月6日	Lecture 7: (9:00 - 12:30) ★Making Effective Presentations (リハーサル)	最終プレゼン準備
24	木	3月7日	最終プレゼンテーション、修了式	在ウガンダ日本国大使館へ帰国の挨拶
25	金	3月8日	出発準備	エンテベ空港出発 17:30 EBB-DOH (QR1384)
26	土	3月9日	乗換え 01:40 DOH-KIX (QR802)	関空到着 17:00

ウガンダ海外実践教育プログラムを通して

農学部生命環境農学科1年 本多さくら

1. 参加動機

私がこのプログラムに参加したきっかけは、海外安全マネジメントという授業を受けた時の留学プログラム紹介で、このプログラムに強く惹かれたからだ。私は、中学生の頃からいつか留学したいとずっと思っていた。コロナウイルスが流行したため留学する機会がなく、大学1年の前期に留学しようと思っていたが、大学の勉強と一人暮らしの大変さになかなか一歩が踏み出せずにいた。いつか必ず留学するからと思い、留学するなら絶対に履修しなければならない海外安全マネジメントを後期に履修することにした。そのときにウガンダという国名を聞き、なんだか心がワクワクした。絶対にこの留学プログラムに参加したいと思った。家族にも相談せずに、一人で説明会に参加した。こんなことは初めてだった。何かしたいと思ったらすぐに家族に相談したり、説明会も友達と行ったりするのに、全て自分の意志だけで行動していた。説明会に参加してより行きたいと感じた。先輩の話をおきただけでもう既に楽しかった。しかし、留学まであと3か月しかなく、パスポートすら持っていない私は、今回ではなく次の機会に応募しようとしていた。母にこのプログラムの事を伝え、来年応募してみようと思うと相談してみると、「今、応募しな」という返事が返ってきた。来年必ず行けるという確証はないし、来年まで行きたいというモチベーションがあるかと聞かれたらわからない。母に背中をおされて応募してみることにした。私には、ウガンダで学びたいことややりたいことが明確にあったわけではなく、ただ自分が知らない世界に行ってみたい、多くの経験を通して自分をより良く成長させたいという気持ちが大きかった。まず、このプログラムに応募し、参加している時点で大きな成長だと思っている。

2. 学んだこと

私が3週間ウガンダで生活して感じたことを、生活、環境、教育の3つの分野に分けて書きたいと思う。

・生活

私が留学する時にすごく不安に感じていたことが、食事とトイレ、お風呂などの衛生面だった。食事はどれもおいしかった。衝撃的だったのは主食の種類の多さだ。主には米、マトケ（バナナを潰したもの）、ポシヨ（トウモロコシの粉を練ったもの）、カロ（キャッサバの粉を練ったもの）、スイートポテトやアイリッシュポテトなどのイモ類があった。2～3種類の主食をチキンやビーフのシチューと一緒に食べるのがウガンダの伝統的な食事だ。日本では一汁三菜が基本のため、主食より主菜・副菜などの野菜やおかずのほうが多くなる。それに対してウガンダでは野菜を食べる習慣があまりないのではないかと感じた。私は、3週間過ごした中でサラダを一度も食べていない。キャベツとニンジンをお酢と混ぜたものはあったが、日本でよく見る生野菜サラダは一度も見なかった。一方で、毎日のように提供されていたのが、揚げたポテトやチキンだった。ホテルで食事をするときは、必ずと言っていいほどフライドポテトがあった。毎食主食が3種類、おかずは揚げ物となると栄養が偏り不健康になってしまう。日本では、ビタミンや鉄分など食事だけでは補えない時はサプリメントを飲むという選択肢がある。しかし、ウガンダでは金銭的に難しいところがあると思う。だから、サラダがおいしくて栄養満点なのだということを知ってほしいと思う。



フライドポテトがのった食事



6種類の主食

トイレやお風呂に関してはさほど困らなかった。湯船につかるということは一度も出来なかったが、シャワーはほぼ毎日お湯が出たので疲れを癒すことが出来た。ウガンダに来て1日目の夜は、お湯が出なかったため水シャワーを浴びた。日本より暑いとはいっても正直、真水は毎日浴びられないなと感じた。次の日はお湯が出た。とても感動した。お湯が出ただけでこんなに嬉しくなったのは初めてだった。私にとって毎日当たり前のように出るお湯も、誰かににとっては当たり前ではないということを改めて実感した。トイレは比較的綺麗だった。ボタン一つで流すことが出来るし、トイレットペーパーが設置されているところが多かった。留学前は、匂いもするし綺麗とは言えないようなトイレだろうと思っていた。しかし実際は、とても綺麗で清潔に保たれていることがほとんどだった。数回ほど桶に水を汲んで流すということをしたが、日本ではできない体験なので少し楽しかった。



ホテル内のトイレ

・環境

ウガンダで一番大変だったことは、臭いと大気汚染だ。カンバラに着いた途端に下水やごみなどの、日本では絶対にしないような悪臭がした。この時に、私はこの中で生活していくのかと少し不安を感じた。バス移動の時に溝や川、草むらの中など、いたるところにペットボトルやナイロン袋のごみをよく見かけた。日本は各地にごみ処理施設があり、町のクリーン活動も他国より活発に行

われているように思う。しかしウガンダでは、ごみ処理場の数が少なく、町中にごみが散らばっているような状態だった。行政がもっと環境問題に力を入れるのも大事だが、国民が自分たちでより良くしていこうという気持ちが大事なのかなと感じた。

大気汚染に関しては、ウガンダではボダボダというバイクタクシーが主流であり、町中いたるところにたくさんのバイクが走っている。そのため排気ガスが町中に充満している。排気ガスにさらされ続けると鼻水や咳などの症状が出てくる。私はこの二つの症状に苦しめられた。3週間の滞在期間でこれだけしんどい思いをしたと思うと、毎日この空気を吸っている人たちは本当に大丈夫なのかと感じた。



草むらのごみ



カンバラ市内のボダボダ

日本と大きく違う点は、道路だと感じた。日本では歩道もきれいに整備されており、道路に穴が開き、がたがた道なんてことはない。ウガンダはきれいに整備された道路もあるが、でこぼこの道も多い。私は、お金をかけて道を作るのだったら、最初から壊れにくい綺麗な道を作るべきだと思った。そうすることで道路の修理費用も削減できるし、歩行者も安全に歩くことが出来るからだ。町を歩いていると、何度もつまずいて転びそうになったし、車との距離が近すぎて危険だなと感じることが多くあった。交通整備も大きな課題の一つだなと感じた。

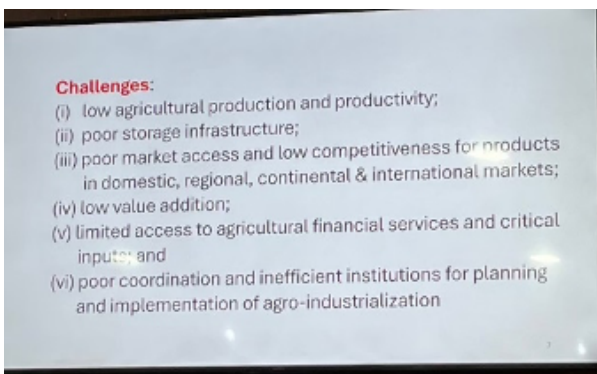


カンバラ市内の道路

・教育

マケレレ大学で講義を受けて感じたことは、スライドが分かりにくいなということだ。日本では、スライド一面にぎっしり文字が埋まっているということはあまりないと感じる。日本では図や写真などを多く入れ、文字はなるべく書かないということがより良いとされている。そのため、一面に英語がぎっしり書かれて、写真や図があまり無いというスライドが新鮮だった。最初は、私たちが英語が聞き取れなくても読めばわかるようにしてくれているのかなと思っていた。しかし、マケレレ大学の先生が作るスライドは大体こんな感じだと言われ、これは退屈な授業になるだろうなと感じた。文字で書かれてしまうと、単語の意味や速読ができないと理解することが難しいが、図や写真があると言葉が分からなくても伝えたいことは大体こんな感じかなと予想できる。私がスライドを作るときは、図や写真を多めにし、文字はあまり書かないでおこうと思った。

ウガンダで偶然出会った男性が、ウガンダの小学校で使われている教科書が難しすぎるという話をしてくれた。英語で最初に学ぶことと言えばアルファベットであるが、そこをすっ飛ばしてすごく難しい長文などの応用問題をしていると言う。日本では、ひらがな、カタカナから始まり、漢字の成り立ちなど基本の基本を1年間かけて学ぶというのに、ウガンダでは基本はすっ飛ばして応用から教えるということに驚いた。また、私は日本の学校では必ず聞くチャイムを聞いた覚えがないなと思った。このことについてもっとTAに聞けばよかったなと思った。ウガンダの人は時間にルーズである。しかし、日本では時間を守ることは当たり前のことである。これは、小さいころからの習慣の違いなのかなと感じた。



マケレレ大学の先生が作ったスライド

3. 最終発表について

私は、水筒を日常的に使うことを提案した。このテーマにした理由は、大学構内や町を歩いたときに、日本に比べて水筒を持っている人が少なかったことと、町中にペットボトルのごみが落ちていたことを多く目にしたからだ。水筒を使う利点を2つ挙げた。

1つ目は、なるべく大容量の水を買い、水筒に移し替えることで、毎日500mLのペットボトルを買うよりお金の出費を抑えることが出来るということだ。2つ目は、大容量の水を買うことによって、ペットボトルのごみを大幅に削減できるということだ。1日1.5L飲むと仮定すると、下の表のようになる。

	500mL	1.5L	20L
1 day	3 bottles	1 bottle	1/13 bottle
1 month	90 bottles	30 bottles	3 bottles
Money	135,000UGX	60,000UGX	45,000UGX

最終発表で使用したスライド

ウガンダでは、500mL、1.5L、20Lの水がスーパーなどで売られている。日本でも同じだが、内容量が小さくなるにつれて割高になる。500mLと20Lを比べると90.000シリングの差がある。また、ボトルの数も87本と大きな差が出る。ペットボトルのごみが減ることによって、ペットボトルを作るときと燃やすときに排出されるCO2を削減することが出来る。また、町からペットボトルのごみが減ると町が綺麗になり、観光業も盛んになるのではないかと考えた。

私はこのプレゼンテーションを通して、改めて自分の生活を見直すことが出来た。いつもあまり値段を気にすることがなく、必要なものや欲しいものを買っていた。しかし、今回のプレゼンテーションの時に、実際どれくらいお金がかかるのかを計算することによって自覚することが出来た。日常的にきちんと値段を考えて行動することで無駄なお金を使うことを防ぐことが出来ると思った。

4. 最後に

私は、ウガンダ海外実践教育プログラムに参加できて本当に良かった。初海外ということで不安も多くあったが、同時にワクワクもしていた。何をするにしても初めてで、すべてが貴重な体験だった。また、ウガンダの人々の優しさとフレンドリーさにとても助けられた。移動中に気さくに話しかけてくれたり、体調を気遣ってくれたり3週間とても楽しく生活することが出来た。

プログラム中にたくさんの日本人の方とお会いした。皆さんとても明るく、パワフルだなと感じた。ウガンダで生活や仕事をしている日本人の方を見て、とてもかっこいいなと思った。私も自分の仕事にやりがいを持ち、前向きに考えられる大人になりたいと思った。

このプログラム中に一番感じたことは、周りの目を気にしすぎないこととお金では買えない幸せがあるということだ。ウガンダでは、各々が好きな服を着て、夜には歌って踊って毎日を楽しく過ごしていると感じた。人と人の距離が近く、よく外で井戸端会議をしていたり、トランプやサッカーをしていたりと、日本に帰ってきて、この風景が見られないのが少し寂しいと感じる。これから私は、「～したい」という気持ちを大切にしたいと思った。仲良くなりたい、話したい、やってみいたいなど興味を持ったことには必ず挑戦すべきだと思った。やらない後悔よりやる後悔とよく言われるが確かにその通りだなと思う。今回勇気を出して留学してよかったなと心の底から思う。

最後までお読み頂きありがとうございました。

ウガンダ海外実践教育プログラムを通して～ウガンダのWell-beingを考える～

農学部生命環境農学科1年 高橋侑希

1.はじめに

「その場所には、そこに住む人たちの“普段の”生活がある」現地での滞在も残りわずかとなったある日、ふとこのように思う瞬間があった。途上国の現状を見てみたいという理由でこのプログラムに参加したのだったが、気がつけばウガンダを「途上国」として見なくなっていた自分に驚きを覚えた。舗装されていないボコボコの道も、はしゃぎながら井戸で水汲みをする子供たちも、時間など気にする素振りも見せない人も、衝撃的な出来事ではあったが案外受け入れることができたのだ。実際にウガンダに住む人たちとコミュニケーションをとり、仲を深めていったことはとても貴重な経験となった。もちろん、わずか3週間の滞在だけでウガンダの本当の姿を見ることができたとは微塵も思っていない。しかし少なくとも、途上国を無意識のうちに下に見るような価値観は払拭することができたと言える。そして私はこの留学期間中、「国際協力において自分の興味がある分野を見つける」ことを目標として日々を過ごした。その際注目したのが「Well-being」の考え方だ。詳しくは2.Well-beingについてで説明する。この「Well-being」の考え方に基いてウガンダの現状を分析し、自分が本当に取り組みたいと思える課題や分野を見つけることを目標とした。



2. Well-beingについて

世界保健機関(WHO)では、「Well-being」を「社会的、経済的、環境的な状況によって決まる個人や社会にとっての良い状態」と定義している。私は鳥取大学の授業でこの言葉について学び、強く関心を持った。なぜなら、近年「Well-being」は貧困の程度を測る新たな指標として世界的に注目を集めているからだ。GDPだけではわからない、ウガンダの本当の豊かさについて考えていきたい。ギャラップ社(アメリカの世論調査研究所)は「Well-being」とは何かについて5つの要素を提示している。それは、①キャリア(Career) ②ソーシャル(Social) ③フィナンシャル(Financial) ④フィジカル(Physical) ⑤コミュニティー(Community)の5つだ。今回はこれらの要素に基づいてウガンダの現状を分析していきたい。また同時に、この中から自分の興味のある問題点を見つけないかと思う。

3. ウガンダの現状

【①Career Well-being (キャリアウェルビーイング)】

まずはキャリアについて。これは教育やボランティアなど、自身の仕事に取り組み充足感を得る幸福のこと(※1)。これに関連するウガンダの現状として私が感じたものは以下が挙げられる。

- **トップの大学(マケレレ大学)を卒業しても、職に就けない人が一定数いる。**

→せっかくマケレレ大学の工学部を卒業しても、ボダボダ(バイクタクシー)の運転手しかお金を稼ぐ方法がないという人の話を聞いた。ボダボダは高等教育の経験や特定のスキルを持たない若者でも運転することができる民間の交通機関。近年カンパラ周辺では人口拡大に伴いボダボダが急増しているが、それに伴い事故数も増えているという。また、家族の農業の手伝いをするという若者もいる。就職先が少ない理由の1つとして、家族経営の企業が多いということが挙げられた。定年退職のような制度がないため、経営トップは年配の方が多らしい。ごく稀にポストが空いたとしても、そこに就くのは子や孫といった家族。生まれたときから自分の将来がある程度決まってしまうというのがウガンダの現状であるのだろう。将来に対して、皆に平等のチャンスが無いというのは残念に思う。



ボダボダの渋滞

- **成績上位校である学校(Gombe Secondary School)でさえ、教科書は図書館から借りる方式。**

→Gombe Secondary Schoolの訪問では図書館を見学する機会があった。しかし、図書館にあったのは使い古されたボロボロの教科書ばかり。生徒たちは毎授業ここから教科書を借りて授業を受けるという。しかも1人に1冊を与えられるほど数はないため、3人で1冊を使う。中には教科書を独り占めしてしまう生徒もいるようで、十分な勉強が出来ているのか心配に思った。ただ、必然とグループで学習しなければならないという環境は、良いものだと考える。わからないところを教え合ったり、勉強面でお互いに助け合ったりすることは、彼らの学習効果を上げているのではないだろうか。日本のように、孤独に受験勉強などをする生徒は少なそうな環境であると感じた。



ゴンベセカンダリースクールの図書館。右は協力隊員の坂本さん

【②Social Well-being (ソーシャルウェルビーイング)】

次はソーシャルについて。これは信頼できる友人を持つなど、強力な人間関係を構築する幸福のこと(※1)。これに関連する現状としては以下が挙げられる。

- **気軽に誰かに話しかける文化がある。**

→私たちはホテルや大学などで現地の人とすれ違った際、よく「How are you?」と話しかけられた。始めはその馴れ馴れしさに戸惑うこともあったが、段々とその会話が楽しく思えるようになった。そのうちに、気が付けばホテルのスタッフの方とも仲良くなっていった。ウガンダの人たちはコミュニケーションの取り方が上手いのだと思う。

- **雨宿りのためにお店に入れてくれた。**

→現地で仲良くなった友達とローカルマーケットに行く機会があったが、途中でスコールに見舞われた。困っていたところ、その友達の友達だという店員の方がお店の中に入れてくれた。初めて会ったのにも関わらず親切な対応をしてくれたことがとても嬉しく、ウガンダの人たちの優しさを感じられる出来事であった。



雨宿り中→



【③Financial Well-being (フィナンシャルウェルビーイング)】

次はフィナンシャルについて。これは収入の多さという尺度だけでなくその使い道など、自分の資産を管理・運用することによる幸福のこと(※1)。これに関連する現状としては以下が挙げられる。

- **ウガンダ国内では貧富の差が激しい。**

→家庭の収入においては裕福な人と貧しい人の差がはっきり分かれており、その中間層がないということを聞いた。確かにマケレレ大学のTA(ティーチングアシスタント)たちは、しっかりと勉強

ができる環境にいて、さらには立派な将来の夢もあった。しかしその一方で、道路で必死に物売る人たちがいるのもまた事実。この格差を実際に肌で感じられたのはとても貴重な経験だったと思う。

- **給料について。**

→ホテルの警備員と仲良くなってその給料を聞いたところ、夜6時から次の日の朝6時まで12時間働いて20,000シリング(日本円で約800円)がもらえるという。しかし、レストランなどの物価は日本とさほど変わらなかったため、ここでもまた格差を感じてしまった。

- **日本人はお金をせびられる。**

→海外協力隊として以前活動していた方とお話しをした時のこと。任地先の農村では最後まで「お金はいつくれるの?」と尋ねられていたという。だが確かに、現地の人々が本当に求めているものはお金なのかもしれない。もしこの先ウガンダのような途上国で何かをするのならば、ただお金をあげるだけでは解決できないような問題に、専門知識を活かして取り組みたいと思うきっかけとなった。

【④Physical Well-being (フィジカルウェルビーイング)】

次はフィジカルについて。これは身体的・精神的な幸福のこと。適度な運動や十分な休息がフィジカルウェルビーイングにつながる(※1)。これに関連する現状としては以下が挙げられる。

- **訪問したKennedy Secondary School では歌とダンスに力を入れていた。**

→ミュージカル俳優顔負けの表現力と熱意は圧巻だった。小さい頃から音楽などの芸術に触れることができる、心が豊かになり精神的にも良い影響を与えそうだと感じた。



ケネディセカンダリースクールの学生による歌と踊り

- **ゴミ問題の深刻さについて。**

→テレビで見ていたような、ゴミ山からゴミを漁っている子供たちが実際にいた。また、ゴミ収集場が劣悪な環境であったり、道に大量のゴミが落ちていたりした。ゴミから発せられる有害物質が周囲の人たちに与える身体的影響が気になった。ウガンダのゴミ問題については 4.マケレレ大学でのプレゼン発表 でも扱った。

- **ホテルの従業員でマラリアに感染しても十分な休みをもらえていなかった人がいた。**

→働く環境の整備や福利厚生などとは程遠い世界なのだと感じた。しかし彼女は、国民の多くが職に就くことができない中で、ホテルで働けていることは恵まれていると言っていた。日本とは全く異なる状況に衝撃を受けた。



仲良くなったホテル従業員

【⑤Community Well-being (コミュニティウェルビーイング)】

最後にコミュニティについて。これは家族や地域といったコミュニティに所属することで得る幸福のこと(※1)。これに関連する現状としては以下が挙げられる。

- **地方でも家が多く集まっている地域には、井戸やソーラーパネル、ネット環境まであった。**

→この現状には、想像よりも発展していたため非常に驚いた。やはり自分の目で実際に見てみなければわからないことがあるのだと実感することができた。

- **子供たちが井戸を囲んで楽しそうに水汲みをしていた。**

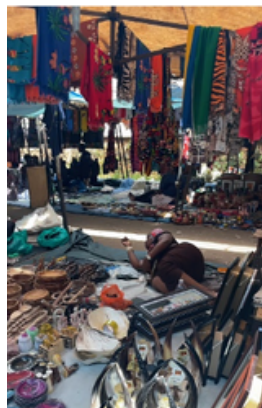
→水汲み=大変 というイメージが覆された。彼らにとっては、重労働である水汲みさえも生活の一部であり楽しみでもあるかもしれない。技術によ

り生活が便利になるということは一概に良いとはいえないかもしれないとはとさせられた。



- **時間の感覚について。**

→やはり現地の方は時間の捉え方が日本人とは異なると感じた。例えば、カルチャーセンターでは21時に終了予定だったものが21時50分に終了した。司会者の方の「これがウガンダです。」という言葉はとても印象に残っている。また、「〇時に集合」と前もって伝えていても30分くらい遅れてくることなども普通にあった。個人的には時間にルーズなもの国民性として評価したいが、実際



にウガンダの人と仕事をすると話が変わってくる。大使館の方とお話しする機会があったが、イベント準備のために手配した業者が3時間以上早く集合してしまい、とても困ったと仰っていた。予期せぬ出来事にも柔軟に対応することが、ウガンダで快適に過ごすために必要なことであると学んだ。

4.マケレレ大学でのプレゼンテーション発表

マケレレ大学での最終プレゼンテーション発表として、「自分が選んだウガンダの課題について、すぐに行動に移せそうな解決策を考える」という課題が課せられた。私が選んだ課題は、3.ウガンダの現状 ④Physical Well-being (フィジカルウェルビーイング) でも述べた、ゴミ問題についてだ。

ウガンダ国内には国立公園などの手付かずで雄大な自然がある一方で、都市では道端や水路に散

● Detail -- Use plastic bags again and again --

When	Shopping
Where	Supermarket, Local market
Who	All buyers
Why	Protect environment
How	Repeat use at least 2 times

乱しているゴミがとても目立っている。その差に衝撃を受けた私は、ウガンダの環境を守るためにポイ捨てゴミの減らし方を考えた。解決策として提案したのは「お店でもらったレジ袋を繰り返して使う」こと。これは、スーパーなどでもらったレジ袋を次の買い物の際に持参して最低2回は繰り返して使うというもの。ウガンダで暮らすどのような人でも今すぐに行動に移すことができ、なおかつ、ゴミの量の削減に効果がある方法ということを意識して考えた。



ではなぜ、ポイ捨てゴミを減らす方法としてレジ袋に注目したのか。主な理由は2つある。1つ目は、プラスチックで出来ているレジ袋は生物に悪影響を及ぼすからだ。プラスチックは紫外線によって分解されると有害物質を放出する。その

有害物質が水に溶けると、生物の体内に入り込む可能性がある。もしレジ袋が道端に放り捨てられたままであったら、太陽に照らされることによって分解が進み、水路を流れる水に有害物質が溶け込む。その水がビクトリア湖やその他の川などに流れていくと周辺に生息する生物、さらにそれを食べるウガンダの人々にも悪影響が及ぶ。2つ目は、レジ袋のゴミは洪水の原因になるからだ。ウガンダ南西部に位置するRwiz Riverでは、近頃プラスチックごみが川の流れを堰き止め、周辺地域に洪水を引き起こすことが問題となっている(※2)。これら2点からレジ袋のゴミは様々な問題の要因となっていることがわかる。

ただ一方で、この「お店でもらったレジ袋を繰り返して使う」という解決策に否定的な意見もあることも承知している。例えば、エコバック（買い物の際にレジ袋の代わりにするバックのこと）

を使用する方が効果があるということや、そもそもレジ袋を生産するときに環境負荷がかかっているということなどだ。しかし、エコバックをわざわざ買うという手間や金銭面から考えると、あらゆる層の人が手軽に挑戦できる取り組みとして、レジ袋を繰り返して使うことは効果があると言える。また、製品の生産・製造・流通・廃棄の際の環境に与える影響を包括的に評価するLCA (Life Cycle Assessment) という考え方がある。これに基づいて紙袋・エコバック・レジ袋を比較すると、その1枚当たりの環境負荷はレジ袋が最も低くなると結果が出ている(※3)。これらのことから「お店でもらったレジ袋を繰り返して使う」ことは、ポイ捨てゴミの削減において簡単でかつ効果的な解決策だと言えることができる。

● ① For health

(1)Plastics deteriorates due to UV light.

(2)Plastics emits additives.

(3)The additives start to dissolve into the water.

(4)Plastics enter the body of creatures as micro plastics.

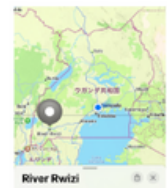


● ② Prevent flooding

・ River Rwizi, is choked with plastic bottles and other plastic waste, causing flooding in nearby towns.



Littering can cause flood



→ from 「Anadolu Ajansi 2021」

● ② Polluting the air when producing plastic bags

LCA

Life Cycle Assessment

● ② Polluting the air when producing plastic bags

LCA (Life Cycle Assessment)

→A method to

comprehensively evaluate

the environmental impact

of this cycle



©Environmental Protection Agency, Ministry of Environment and Urban Planning, Uganda

● ②Polluting the air when producing plastic bags

Recommended number of reuses



44 times



35 times



2 times

マケレレ大学での発表では、沢山練習をしたことで自信を持って話すことができた。しかし、質疑応答では悔いが残ってしまった。なぜなら、質問の内容は聞き取ることができたのに、それに対して自分の考えを英語で上手く伝えることができなかったからだ。自分の英語力の無さを痛感すると共に克己心が芽生えた。今までは英語のレベルに関して、なんとなくコミュニケーションが取れば良いという考えであったが、この質疑応答を通して、相手と対等に議論ができる技能を身に付けたいと強く思うようになった。この悔しさを忘れずに英語学習に力を入れていきたい。

最後に

今回の短期留学で私が掲げた目標は「国際協力において自分の興味がある分野を見つける」というものであった。この目標を達成するために「Well-being」の考え方に基づいてウガンダの現状を分析したわけだが、ここでわかったことが1つある。それは、小さな幸せは日常の中にたくさん転がっているということ。ウガンダの人々はコミュニケーションをととても大切にする。私たちのような見慣れない外国人に対しても気さくに話しかけてくれる人がいるし、もちろん彼ら同士のやりとりも活発だ。そして皆が、その場を楽しもうとする気持ちを持っている。例えば、ホテルのウェルカムパーティーで従業員も一緒に踊り出したり、バスの運転手の方が談笑しながら運転していたりした。労働環境が悪くても、娯楽施設が少なくても、彼らは「楽しみ」を見つけることができる。私はこれまで、途上国の生活というのは金銭的に苦しく、生きていくのが辛い状況があると勝手に想像していた。しかし実際は異なり、ウガンダの人々は彼らの生活を彼らなりに楽しんでた。豊かさというのはお金の有る無しに関わらないということを実感した。

その上で私が興味を持ったのが、生活基盤とな

るライフラインについてだ。電気やガス、水道といった設備は人々の生活にとってとても重要である。米を作るためには水の供給が必要だし、離れた家族と連絡を取るには通信システムの発展が欠かせない。これらが十分でなければ、人々は幸せな生活を送れないのではないか。今回ウガンダを訪れてみて、想像よりもライフライン設備が発展していたと感じた。例えば、都市から離れた場所でもネットが繋がったし、SIMを売る店も多くあった。また、マーチソンフォールズ国立公園近くの町では太陽光発電システムが見られた。確かに、トイレの水が流れにくかったり、協力隊員の方が雨水を生活用水としていたり、まだまだ現実には厳しい状況にあるということも学んだ。このようなことから、今ある幸せを支えるために、そしてさらなる幸せを生み出すために、私はライフライン設備について勉強していきたいと思った。まずは日々の大学での学びを大切に、ゆくゆくは専門知識を持つ者として世界で活躍できるような人材になりたい。

出典

(※1) 池田さくら. “ウェルビーイングの意味を簡単に解説！5つの要素や福祉や教育の事例も紹介”. Spaceship Earth. 2023. <https://spaceshipearth.jp/well-being/>. (参照 2024-03-29)

(※2) Godfrey Olukya. “Plastic trash causes environmental, health hazards in Uganda”. Anadolu Ajansi. <https://www.aa.com.tr/en/africa/plastic-trash-causes-environmental-health-hazards-in-uganda/>. (参照 2024-03-29)

(※3) “Life Cycle Assessment of Products and Systems”. DTD. <https://lifelonglearning.dtu.dk/en/sustain/single-course/life-cycle-assessment-of-products-and-systems/>. (参照 2024-03-29)



ウガンダ海外実践教育プログラムを通して

農学部生命環境農学科1年 齋木八重子

1. 参加動機

このプログラムに参加した理由は3つある。1つ目は途上国のおかれている環境に興味があったからだ。特に貧困問題や教育、農業についてだ。それらを教室ではなく実際に見に行けるめったにない機会だと思ったからだ。2つ目はこの留学以外で自分がアフリカに行く機会はないと思ったからだ。3つ目は友人と一緒にウガンダに行こうと誘われたことだ。友人の誘いがなければ英語に苦手意識のあった私は留学に行く1歩を踏み出せなかったと思う。

2. 学んだこと

(1)ウガンダの農業

ウガンダはアフリカの中でも農業環境がとても優れている。年間降水量は1200 mm程度であり日本(1700 mm)*1とさほど変わらない(国土交通省水害対策を考える 3-1-1世界平均の2倍、日本の降水量より)。またビクトリア湖やキョガ湖から流れる多くの河川があり、標高4000 mを越すルウェンゾリ山地とエルゴン山からも豊富な水が流れ、肥沃な土壌が分布している。そのため農業関係者が多く、全体人口のおよそ7割いる(表1)。しかしGDPの農林水産業が占める割合は24.01%とかなり低い(図1)。私はこのGDPの低さの理由は4つあると考えた。

1つ目は自国で加工工場を持たず他国に大量に安価で輸出してしまうことだ。これはウガンダ人

表1：ウガンダの業種別人口割合

Table 2.3.3: Distribution of the Working Population by Industry (%)

Industry	UNHS 2016/17			UNHS 2019/20		
	Male	Female	Total	Male	Female	Total
Agriculture, forestry, and fishing	58.5	70.5	64.6	63.0	73.1	68.1
Trade	11.5	12.8	12.1	10.0	10.9	10.4
Manufacturing	5.1	2.5	3.8	4.1	4.5	4.3
Education	2.8	2.5	2.6	3.0	2.3	2.6
Transportation and storage	6.5	0.0	3.2	5.8	0.1	3.0
Construction	5.2	0.0	2.6	4.7	0.1	2.4
Hotels, restaurant eating places	0.9	3.3	2.1	0.7	2.7	1.7
Other service activities	0.6	1.9	1.2	2.8	1.7	2.3
Others	9.0	6.5	7.7	6.1	6.5	5.3
Total	100	100	100	100	100	100

Source: UBOS

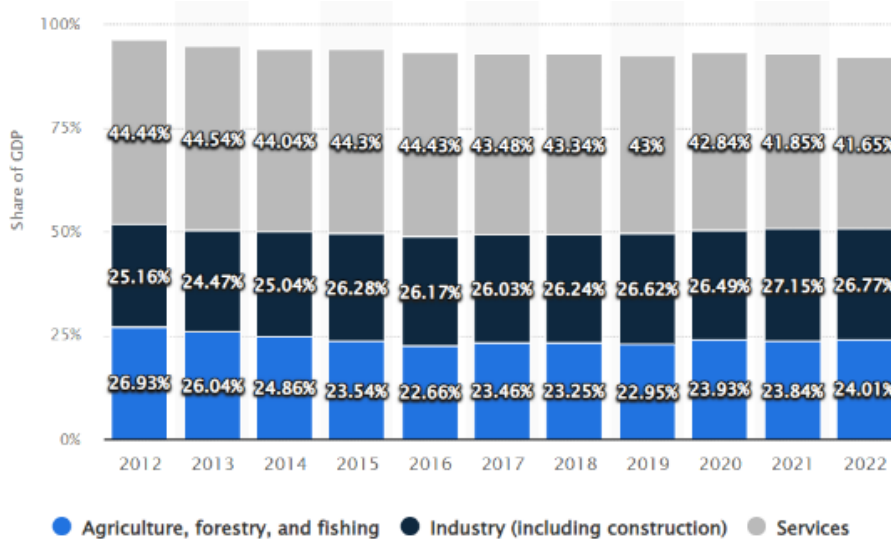


図1：ウガンダのGDP内訳 (statistaより)

の潜在意識の問題で、自国製品への信頼が薄く、輸入品を買ってしまう傾向にあるからである。2つ目は農地をうまく活用できておらず生産効率が悪いことだ。農業に使える肥えた土地が国土の88%あるにもかかわらず、たった30%しか使えていない現状がある。3つ目は作物の管理方法がずさんで倉庫を使用しないことだ。せっかく品質の良い作物が採れたとしても、管理方法が悪ければ品質が悪くなり、自然と売り値は安くなる。また保管ができないため熟す前に売り出すので安値になってしまう。4つ目はローンへのアクセスが少ないことだ。一般の農家が農地を拡大しようと思っても、資金調達が困難でお金の借り方の情報すら少ないのが現状だ。

これらの課題を考え思ったことがある。それは、どれも難しい問題や大金を必要としているわけではないということだ。これらは1人ずつの意識変革や基礎的な知識を得ること、また簡単な行動を起こせば解決する問題である。しかしこれこそがウガンダ(後進国)の問題なのだと思ふ。人々は今日を生きるのに必死で効率など考える余裕はない。そもそもネット環境はかろうじてあるが携帯などのデバイスを持っている人は多くない。そのため情報を得ることは簡単ではなく、この現状から抜け出すため何か行動を起こそうとしてもその一歩は難しく重い一歩になる。世界中で情報があふれている今、このような人々が社会から置き去りになり、情報格差、収入格差など様々な格差が生じ、取り残されつつあると感じた。

(2)将来の考え方

この留学を通して1番変化し、学んだことは将来の考え方だ。大学に入り、自分のやりたいことをどう仕事につなげていけるかを考え始めたり、自分が本当にやりたいことはこの道で合っているのかなど、漠然とした不安が湧いていた。私自身、海外で働きたいと思っていたわけではなく、ましてや私が海外で働くなんて出来なかった。しかし今回のプログラムは、海外を飛び回っている人や、日本人人口が極めて少ないウガンダで生活している人からお話を伺える貴重な機会だと思い、プログラム中に会った日本人に積極的にキャリアやプライベートについて伺うことにした。彼らのキャリアやプライベート、結婚観などについての考え方は私が今まで触れてきた価値

観と違い、全く新しいもので非常に興味深かった。一人は、若い時から銀行員で堅い仕事を長年してきたが、ひよんなきっかけから海外協力隊として世界を転々とし、今はウガンダ人のパートナーを持ち海外協力隊事務局で隊員を支えている方。一人は、獣医師の免許を持ちつつ新卒で協力隊員となり、ごみ問題を実務内容として動物園で活動されている方。一人は、商社マンとしてさまざまな国と日本を行き来した後、退職して行政機関に再就職しウガンダへ渡った大使、など。皆さんの生き方が三者三様であった。逆に今まで私が感じていた一般的なキャリア形成例である、大学または院を卒業し比較的安定した企業に入り、数年務めた後、職場が合わないもしくはキャリアアップのため1,2回転職、という方は見かけなかった。私は、海外で働くことはできないという考え方から、海外で働くということは生き抜く力さえあれば他に特殊なスキルや異次元な程の優秀さが必要なわけではない、と気づくことができた。もちろん語学力はある程度必要とされるが、最初から完璧な人なんていないし、海外だから仕事内容が全く違うわけではない。ただ仕事場が日本ではなく海外なだけである、とさえ思うことができた。そのため今は海外で働きたい、というより自分のやりたいことがそこにあるのなら海外でも躊躇することなく行きたいという考え方になった。

(3)相対的貧困と精神的貧困の違いへの気づき

私はこのプログラムに参加する以前、将来の夢を聞かれたら、ウガンダをはじめとする途上国を、より発展した豊かな国にする手助けがしたい、と答えていた。しかしこれはエゴだったのかもしれない、そう気づかされたプログラムだった。



この3週間を通して常に感じていたのは現地の人々の心の豊かさである。技術や経済など様々な物事が発展している先進国のほうが幸せである、という強い固定概念を持っていることに気づかされた。特に記憶に残っている風景がある。それはマーチソンフォールズ国立公園へ行く日の朝、バスから見た風景だ。日の出とともに起き、特に会話する様子もなくただ家の前に座っている夫婦。きっとこれは彼らの日常なのだろう。同じような夫婦を何組も見したが、私の目には彼らが不幸せそうには映っていなかった。たとえ仕事がなくとも携帯がなくとも、きれいな洋服がなくとも、ボロボロの靴だとしても、彼らにとってはそれが当たり前なのだろう。一見不幸せそうに見えるが、彼らはそのおかれた環境の中で何不自由なく暮らしているようにも思えた。ここウガンダでは多少時間にルーズでも怒る人はいなかった。日本のように街中のあちこちにモニターや広告があり、常に何らかの情報が目に入り無意識に頭を稼働させている時間もなかった。このような環境に私は心地良さまで感じた。これはウガンダが良く、日本が悪いと言いたいわけでは無い。ただ途上国には、私が失いかけていた心の豊かさがあった。これに気づけたことは、私にとってかけがえない経験になった。

3 最終発表

私が最終プレゼンで提案した考えは「ジェリカンに文字を書く」というものだ。これだけではさっぱりわからないと思う。以下でそれを説明する。

まずこれはウガンダの教育についての発表だ。この分野を選んだ理由は2つある。1つ目は、すべての物事は教育によって出来上がっていると考えたからだ。例えば知識を得ること、コミュニケーション能力、倫理観、道徳観などだ。2つ目は、右図2の貧困の負のループから抜け出すのに教育が必要不可欠だと考えたからだ。この図は日本では有名だが、マケレレ大学の学生にはあまり知られていなかった。このループに陥ると抜け出すのは非常に困難で、自分たちだけでなく子供たち、孫の世代までもが貧困の負のループから抜け出せなくなる。そのため、この状況から抜け出すためには教育を受け基礎的な知識を身に着けるのが最善の道だと思ったからだ。

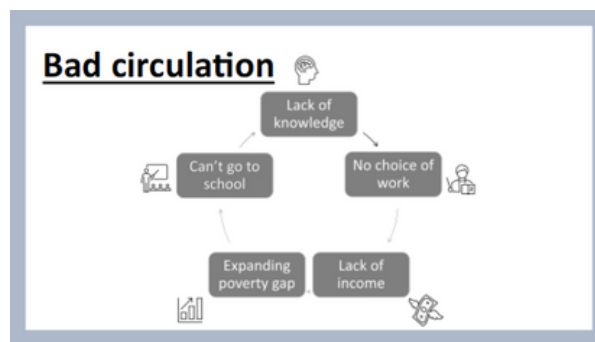


図2：貧困の負のループ

表2：就学率等におけるウガンダと日本の比較

Elementary school	Gross Enrollment Rate (粗就学率)	Net Enrollment Rate (純就学率)	Completion Rate (修了率)
Uganda	110.1%	92.1%	61.5%
Japan	102%	100%	99%

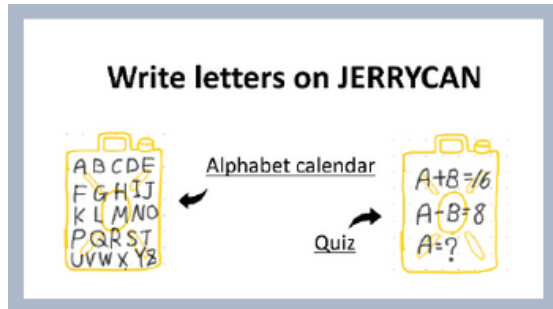
MINISTRY OF EDUCATION AND SPORTS
FACT-SHEET-2016.pdf (education.go.ug)

次に、ウガンダの教育の現状として小学校すら卒業できない子供が38.5%いる（表2）。日本の99%と比較するとウガンダの数値がとても低いことがわかる。それらの主な理由としてはお金がない・通学範囲に学校がない、などがある。

そこで、家にいながらも勉強に興味を持つきっかけになることと、どんな子供でもみんなが平等に可能となることを考えた。そこで考えたのが「ジェリカンに文字を書く」というものだ。前提として「ジェリカン」とは生活用水を入れるタンクで、価格は5000シリング。日本円で約200円と非常に安価で、ウガンダのほとんどの家庭に複数個あるとされるものだ。以下でこの提案の詳細を説明する。ジェリカンに書く文字の例として、アルファベット表や簡単な数字のクイズを挙げた。これは、日本でよく見られるひらがな表やアルファベット表を見習ったもので、よくトイレやお風呂に貼ってある。「ジェリカンに文字を書く」のもこれらと同様の効果があると考えられる。なぜならジェリカンは、自宅のよく目につく場所にあると考えるからだ。私はその効果として2つあると考える。1つは自然かつ無意識にアルファベット表や数字を記憶できるということだ。これはとても重要だと考える。2つ目はコミュニケーション能力が向上する効果だ。なぜなら、クイズなどを通して家族や友人と話すことにより、会話量の増加が予想されるからだ。



ジェリカン：生活用水を入れる黄色いタンク



最後に、この提案の実行方法だ。今回2つの方法を提案した。1つ目は、ジェリカン製造会社に話を持ち掛けることだ。ジェリカンの製造会社は複数あり、1番有名などころではNice house of plasticがある。この会社はマケレレ大学の学生のほとんどが知っているほどの大企業である。そのため、現実的とは言えない。2つ目は、既に国民が所持しているジェリカンに書き込むというものだ。具体的には、ボランティア団体に協力を促したり、理解していただける村の人と協力することが挙げられる。これは一見途方もない作業に感じるだろう。なぜならウガンダには多くの人、そして多くのジェリカンがあるからだ。しかし私はこの方法こそが重要だと感じる。なぜなら私が接したウガンダ人の多くは、解決すべき問題に対し自分たちで何ができるかを考える前に、それらを政府の責任にする傾向があると感じたからだ。その意識改革としても、まず政府に頼らずに自分たちでできる地道なことを提案したかったのだ。以上で私の最終発表の説明を終わる。

4. 最後に

最後に、このプログラムに関わって下さったすべてのの方々に感謝を伝えたい。ウガンダまで引率して下さった蕪木先生をはじめ、私たちに付き添って下さったコスマスさん、また国際交流課の先生方、マケレレ大学の先生方、大使館の方、TAのみんな、ウガンダで会うことができたJICA関係者をはじめとする日本人の方々、そしてこの3週間を共にしたプログラムメンバーのみんな。たった3週間だったかもしれないが、間違いなく人生で一番濃い3週間だった。これから先も色褪せない思い出となった。

このプログラムを通し、外から日本を見て、日本のことをさらに知りたいとも思えた。このプログラムで得た貴重な経験と好奇心を大切に、これからの大学生活に活かしていきたい。



歩いてマケレレ大学へ



マケレレ大学生の前で日本についての発表



ウガンダ海外実践プログラムを終えて

農学部共同獣医学科1年 梶岡ひかり

1. 参加動機

私がウガンダ海外実践プログラムに参加した一番の理由はとても単純である。アフリカに行ってみたいと思っていたからだ。幼少期に、アフリカで行われている白サイの保護活動の様子をテレビ番組で見てから、私はずっと現地の国立公園を訪れてみたいと思っていた。しかし、アフリカ大陸は旅行で気軽に行くことが難しい地域であるため、それは現実的ではなかった。もともと留学に興味のあった私は、受験期に大学探しをしている際、各大学の国際交流に関するホームページをよく見ていた。獣医学科のある国立大学のうち、アフリカ大陸へ行く留学プログラムがあるところはほとんどなく、このプログラムは鳥取大学を志望する理由の一つになった。参加すれば国立公園への訪問も可能であり、さらに、大学主催の短期留学なので比較的安全である。私にとってまたとないチャンスだと思い、迷わず参加を志望した。

2. 訪問先での発見と学び

このセクションでは、訪問するまで抱いていたイメージと比較しつつ、現地に行って実際に体験したことで得た気づきを、主に食事、衛生、公共交通機関の3つの観点から述べる。

・食事

事前研修で聞いていた通り、未熟のバナナを蒸かしたマトケ、トウモロコシの粉を練ったポシヨなど、日本ではなかなか味わえない主食を楽しむことができた。特においしかったのはRolex（ロレックス）だ。チャパティというタコスの皮のようなものに、数種類の野菜をみじん切りにしたものを混ぜた薄焼き卵を巻いたもので、ウガンダのジャンクフードに当たる。Entebbe Zooで昼食として食べたのが最初だが、ホテルでも食べることができた。お手ごろな価格でありながら、量も十分にありコスパの良いメニューであった。そして、食事に関して最も衝撃を受けたことは、スープボウルがないということだ。マケレレ大学の食堂やホテルの朝食では、日本でいう給食の配膳に

よく似たスタイルで、大量のおかずが用意されているところに並ぶと、スタッフが自分たちの皿に次々と乗せてくれた。主食、主菜、副菜がすべて一枚の皿に乗るところまでは抵抗はなかったが、最後のスープは、それまでに取ったおかずの上に全部かけられた。ワンプレート形式なのは、洗いを少なくしたいからだと思うが、分けてほしかった。ホテルのレストランでは、シェフによって提供される料理のクオリティにかなりの差があり、第3次産業における日本との違いを感じた。パイナップルやマンゴーは日本よりはるかに安価で甘く、非常においしかった。



ロレックス



スープがのったおかず

・衛生

前回のプログラムに参加された方からお話を伺ったとき、トイレトペーパーの持ち歩きが必須だと言われていた。やはり、発展途上国では衛生環境が悪いのだと覚悟して行った。しかし、大体は水洗でトイレトペーパーもあった。中にはその水流が弱すぎたり、匂いがひどいところもあったりしたが、想像よりはるかにトイレは綺麗だった。現地のトイレトペーパーと日本から持ち込んだものと比較すると、日本製のものはひと巻きでかなり長持ちすることが実感できた。ウガンダ産は2人で3日使うとほぼ無くなってしまったのだ。ここでは第2次産業のレベルの違いを感じられた。ホテルのお風呂はお湯が出る日も出ない日もあったが、問題なく使えた。ルームサービスは毎日あり、水、トイレトペーパーの補充、シーツと枕カバーの交換、ベッドメイキングなどをしてくれた。部屋によってエアコンが壊れていたり、Wi-fiが繋がりにくかったりすることはあったが、想像以上に清潔で快適な生活を送ることができた。

・公共交通機関

ウガンダには電車や地下鉄がないため、バイクタクシーのboda-boda（ボダボダ）やマトツという乗り合いの車タクシーが多く存在する。日本の原動機付自転車よりも一回り以上大きいバイクに、2、3人乗っているのがよくある光景であった。ボダボダにもマトツにも定員以上に人が乗っていた。運転者だけがヘルメットをかぶっており、かなり危険そうだった。想像していたよりもボダボダの数が多く、それによる大気汚染もひどかった。道路には凹凸が目立ち、幅も狭く信号機もかなり少なかった。時間帯によって、ひどい渋滞に巻き込まれることも多々あった。バイク、車、人の行き来は激しく、道路を横断するのはかなり緊張した。使われている車は日本製が目立っていた。日本が世界的に見ても自動車産業に強いことはもちろん知識として持っていたが、実際に日本からほど遠いアフリカのウガンダでたくさんの日本車を見ると、感慨深く感じられた。日本出身だと伝えると、笑顔で「Honda」「Nissan」「Toyota」などと話しかけてくれるウガンダの方々印象に残っている。



ボダボダ。運転手だけヘルメットをかぶっている

3. Entebbe Zoo

Entebbe Zooでは、日本で獣医師免許を取得されJICAの協力隊として活動されている2名の隊員にお会いし、貴重な話を聞くことができた。私は、将来海外で動物にかかわる仕事がしたいと思っていたため、この仕事に就くに至った経緯や実際に働いてみて得た印象など、様々な質問をした。特に印象に残っているのは、獣医師免許にあまりこだわらず、したい仕事をするためにJICAで活動されていたことだ。ウガンダでは、獣医療への関心とその水準が日本よりもはるかに低く、日本のように働こうとしてもうまくいかないことが多いらしい。獣医療にこだわらなくても、彼女

らのように自分のあこがれの仕事を選択するのもいいと思った。特に嬉しかったのは、白サイを近くで見られたことだ。アフリカに興味を持つきっかけになったサイを間近で見学できて、この上ない感動と達成感を得ることができた。



Entebbe Zooの白サイ

4. Murchison Falls National Park

この段落では、私が一番楽しみにしていたアフリカの国立公園訪問での経験を述べる。初日はVictoria NileをMurchison Fallsを目指して上流に向かうクルーズツアーに参加した。往復3時間ほどの船旅では、いくつかのカバの群れや水を飲みに来たゾウ、キリン、鳥類を見ることができた。そして、クロコダイルがカバの死体を食べているところに遭遇した。二日目は、サバンナの中をバスで走り回りながら、いろいろな動物を探した。キリンをはじめとしたさまざまな草食動物、ライオンやバッファローを見られたのがとてもよかった。国立公園は信じられないほど広く、ただずっと続くサバンナの地平線を見ているだけで幸せを感じた。

5. プレゼンテーション内容

私がウガンダで生活している間に気が付いた課題は、日本にはない貴重な自然があるが、それらを慈しみ守ろうとする国民の意識が低いということだ。例えば、ウガンダではフクロウが不幸の象徴として考えられており、庭に現れたフクロウを殺してしまう人が多い。また、漁の妨げになるからとカワウソもたくさん殺されている。Entebbe Zooを見学したときは、人気のある大型動物は大切に扱われているが、小動物や家畜などは見捨てられていることも多く、動物の中に大きな差があった。そこで私は、日本の小学校で行われているように、生き物の飼育を通して慈愛を育ててもら

おうと考えた。日本の学校での動物飼育のシステムを伝え、掃除や給餌を経験して生き物との関わり方を学び、社会性や思いやりの気持ち、責任感を得ることができると紹介した。学校での飼育経験が生き物や自然に対する興味を持つきっかけになればよいと思った。

6. その他

実は、私はウガンダ到着から4日ほど経過したあたりから体調を崩してしまった。ここでは、そのときの症状や経験について述べる。はっきりとした原因はわからないが、おそらく食べたものから細菌性胃腸炎になっていたのだろうと思う。腹痛、発熱、吐き気、倦怠感が主な症状で、ひどいときは寝返りを打っただけでも腹痛が収まらなかった。日本で風邪をひいたときや下痢がひどいときは、温かいうどんやおかゆなど消化によさそうなものを食べつつ、スポーツ飲料を飲んで脱水にならないよう気を付けながら様子を見ようと思うが、ウガンダにはそれらは全くない。食べられそうなものが何もなく、絶望を感じ、精神的にもかなり弱ってしまった。一緒に参加したメンバーに粉末のスポーツ飲料や薬を分けてもらったり、話し相手になってもらったりしながら生活した。先生方に現地の病院に連れて行ってもらったこともあった。日本より清潔感は劣るが、女性の医師も思っていたより多く、優しくかった。結局、丸々1週間ホテルから出ずに療養することになってしまい、かなり残念ではあったがこの経験をしたからこそ、日本の安全さのすばらしさを実感できたうえで、仲間の助けのありがたみを感じられた。

7. 最後に

このプログラムに参加したことで、私はずっと叶えなかった夢を実現させることができた。鳥取大学とマケレレ大学両大学の関係者の皆様、ウガンダで常に行動を共にしてくれたコスマスさん、そして3人のTAたちには感謝してもしきれない。ウガンダで活動されている隊員の方とお会いできたことは、これから本格化する専門科目の学習へのモチベーション向上にも繋がった。かけがえのないこの経験を決して忘れずに、今後も世界に目を向けて、人生を楽しんでいきたいと思う。

